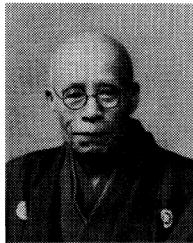


矢野恒太(やの つねた) —

磯村英一

(東京都立大学、東洋大学名誉教授)

慶應元年（1865）12月、岡山県上道郡角山村字竹原（現在の岡山市竹原）に生れる。家系が代々医者であったことから、岡山藩がつくった「医学教場」（維新後改称して「岡山県病院」となっていたところ）で医学を学んだ。しかし明治13年に“脱走”して上京、最初は東京独乙語学校に入学するが、半年余で、東京大学医学部予科の試験に合格する。しかし16年に帰郷し、はじめいた岡山県医校に再入学。卒業して大阪の病院に就職を希望するが、恩師に当る病院長が、たまたま日本生命保険会社の“顧問医”をしていたことから、同社への就職を奨められる。（明治23年、月給25円。）それが縁となって、生命保険界で名をあげることになる。しかしこまでは、都市計画などとは全く無縁、専ら保険業界で活躍し、第一生命を創立する。大正10年には、その本社を京橋の角に移し、当時としては、都心のシンボル的な建築となったが、たまたまこの年に、当時財界の中心として活躍していた渋沢栄一から、「田園都市株式会社」の経営の協力を求められる。



大正5年、渋沢栄一はアメリカを視察し、田園都市事業の将来性に目をつけ、現在の東横沿線の“洗足”に45万坪の土地を求める、同時に目黒から多摩川畔までの鉄道敷設権も獲得し、（当時は荏原電気鉄道といわれた）、住宅と鉄道を経営する「田園都市株式会社」を発足させる。大正7年である。しかしだ正9年のパニック等で事業ははかばかしくない。渋沢は、第一生命に経営を任せせる。

しかし矢野恒太は、45万坪の土地をどう手をつけるか見当がつかず、たまたま大阪の郊外で小林一三が宝塚を中心にまちづくりに成功しているのを聞いて協力を求め、同時に五島慶太に鉄道の経営を任せる。そして2年後の関東大震災は、災害をうけた都心の有力者が争って郊外に住宅を求めてことから順調な経営となり、加えて東京高等工業学校（現在の東京工大）も蔵前から大岡山に移り、前者の1万2千坪と後者の9万2千坪の交換も利益をもたらすことになり、「田園都市」は日本の高級住宅構想のモデルとして今日でもその環境が維持されている。矢野自らは大正14年に1700坪を現地に求め、自家の周辺に親戚を住わせている。長男の一郎氏はその志について、本社の移転を構想した。

昭和26年（1951）9月、自宅で逝去、享年85歳。